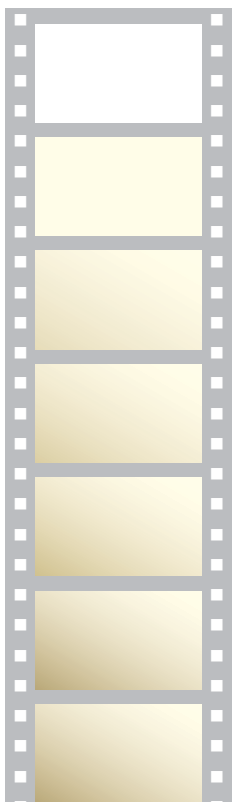


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第二十回 「自然と人間②」

「自然と人間」をテーマにした映画はいろいろありますが、ぼくにとって生涯忘れられない映画は「八甲田山」（77年製作・監督 森谷司郎）です。

この映画は今から109年前の明治35年1月末発生した「八甲田山雪中行軍事件」を映画化したものです。

明治時代、日露開戦（日本と旧ソ連との戦争）を目前にした帝国陸軍は、寒地装備と耐寒訓練が不足していました。陸軍は、露軍ロシアと戦うために、寒さとは何か、雪とは何か、その真実の姿を知る必要があったのです。

青森第五連隊の神田大尉（北大路欣也）と弘前三十一連隊の徳島大尉（高倉健）は、友田旅団長（島田正吾）から「冬の八甲田を歩いてみないか」と直接声をかけられました。冬の山岳とすれば生きて帰れぬ「白い地獄」といわれる八甲田山雪中行軍。二人の大尉はその責任の重さに慄然としたのです。

弘前三十一連隊は27名の小隊編成で、青森第五連隊は、山田少佐（三國連太郎）

ほかの大隊本部が随行する210名の中隊編成で臨む計画が決まりました。それは、二つの隊が雪の八甲田で出会う約束を果たすための計画でもあったのです。明治35年1月、「大寒」の頃、計画は実施されました。しかし、天候が悪化して大暴風雪となり、青森第五連隊の210名中199名が凍死したのです。一方、弘前三十一連隊は一人の落後者も出さず雪の八甲田を踏破したのです。

公開当時（昭和52年6月）、この映画のテーマは、「上司と部下の関係が悪かったからこのような大惨事になった」という組織論を取りざたされ、それを裏付けるかのように製作会社には、「新人教育に使用したので映画の貸し出しをしてほしい」という要望が多く寄せられました。

しかし、製作・脚本を担当した橋本忍氏（今年93歳）は製作意図の中で次のように書いています。

映人社発行 橋本忍著 「映画「八甲田山」の世界」から抜粋

「この映画は耐寒演習などを行う軍隊の非人間性とか、命令指揮の乱れとか、成功した隊の用心深さ、周到さ、誤らない処置とか、一糸乱れずそれに応えた隊員の

勇氣とか、そんなことを対比して描くのが目的ではない。青森第五連隊は大部隊によつて自然を克服、つまり征服しようとした。しかし弘前三十一連隊は自然に逆らわず、それとは折り合い、その猛威と厳しさに耐え、克服するのではなく、生きるための妥協点を強い勇氣で合理的に求めた（以下略）」と記しています。映画「八甲田山」はまさにその製作意図を貫いています。もうひとつ踏み込んで考えると、これは、「エコロジー（生態学・生物と環境との関係を研究する学問）をも語っているのではないか？」という評論家もいます。

映画のセリフのなかで徳島大尉（高倉健）は言います。

映人社発行 橋本忍著「映画「八甲田山」の世界」のシナリオから抜粋

25 弘前―三十一連隊・連隊長室

徳島 「調査をすればするほど恐ろしい……日本海と太平洋の風が直接ぶつかり、冬の山岳としてはこれ以上はない最悪の地帯です。おそらく今後三十年、五十年、いや、百年たつても、冬の八甲田は頑として人を阻み、通ることを許さないのではないかと思います」

セリフにもあるように100年以上たっても冬の八甲田では遭難事故は絶えません。映画「八甲田山」のテーマ「自然と人間」をいま一度考える時、現代こそ、自然をもっと大切にしなければいけない時代に入っているのではないのでしょうか！それが究極のテーマだと考えます。

(了)

伸

平成23年6月